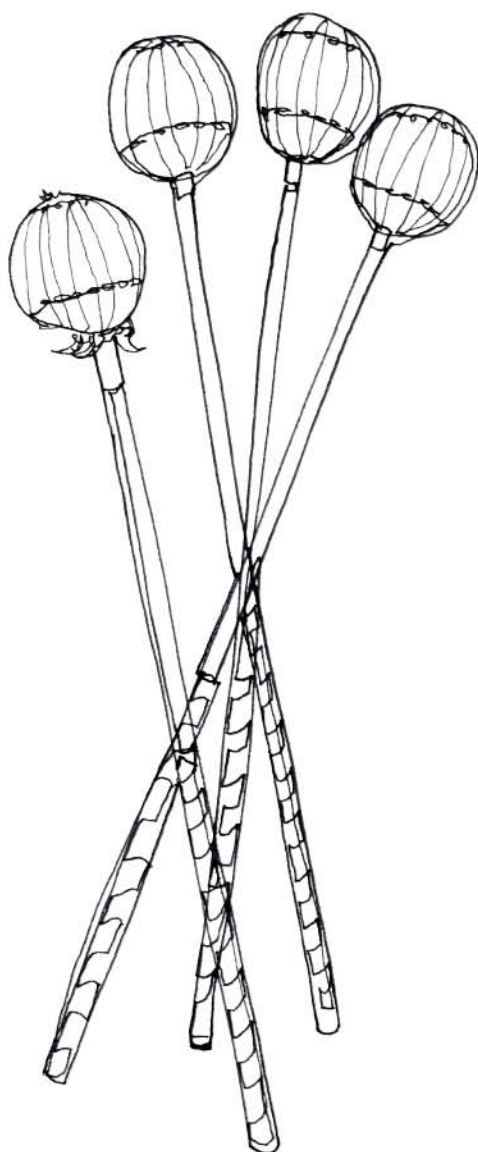


ふえき

時代を超えて変わらないもの



特集

2025年度福武教育文化賞贈賞式

89

2025年度（第7回） 福武教育文化賞



熱き想いを胸に躍進する3個人+1団体へ贈る

今年で7回目を迎える「福武教育文化賞」の贈賞式を10月25日（土）に開催し、岡山の教育・文化の発展に功績のあった3名と1団体に贈賞しました。式典には、ご来賓や受賞者の同行者など約130名が出席。受賞者に対して表彰状と副賞30万円、さらに蛭田二郎氏（日本芸術院会員）制作の記念メダルを贈呈しました。



当財団ウェブサイト
に受賞者の表彰理由・活動
実績を掲載しています。
ぜひご覧ください。

大学教員（舞踊教育学）・舞踊家
小澤 尚子氏（岡山市）

劇作家・演出家
角 ひろみ氏（岡山市）

作家
天川 栄人氏（岡山市）

特定非営利活動法人
備前ブレイパークの会
代表理事 北口ひろみ氏（備前市）

福武教育文化賞とは

岡山県の教育文化の向上に著しい貢献が期待される個人・団体に贈られる賞です。
本賞の選考にあたっては、活動の原動力となる「高い志」、既存の枠を超えた「先駆性」、そして地域社会にポジティブな変化をもたらす「波及効果」が期待できるか、という点を特に重視しています。

活動紹介ハイライト

贈賞式では、受賞者の皆さまによる活動紹介として「これまでの活動」そして「今後の目標」について、映像を交えながら熱のこもったプレゼンテーションを行っていただきました。
角氏は、2024・2025年の活動として朗読劇「劇場で出会う文学」の演出や高校生との戯曲創作ワークショップ「ハイスクールEeECoE」を紹介。「演劇を通してもっと岡山の街を知りたい。岡山で作られた演劇を観た方が、この地域の文化を誇り、幸せに思ってもらえるように」という想いから、岡山を題材にした作品制作への意欲を語られました。

天川氏は、自身の執筆活動について、中高生向けの作品では「たった一つの正解を用意するのではなく、選択肢をたくさん用意してあげたい。問いを投げかけるような気持ちで作品を書いています」と語られました。岡山を舞台とした新作小説の構想にも触れるなど、今後の活動展開に期待が寄せられました。
備前ブレイパークの会では、スタッフを代表して山口氏に発表を行っていただきました。同会は「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どもが主体となる「遊育を実践しています。自ら遊び、考える力を育てることが、生きている実感や「自分ら

しく生きること」に繋がると語られました。今後も備前ブレイパークを拠点に「遊び」の価値を広めていきたいと展望を述べられました。
小澤氏は、環太平洋大学ダンス部の創作舞踊を紹介し、「イメージできるものは必ず実現できる」という自身のモットーを子どもたちに繋ぎ、新たな土台を作っていきたいと語られました。スライド発表の後、環太平洋大学ダンス部およびPRUDANスアカデミーの皆さまによるダンスパフォーマンスが披露され、躍動感あふれる華麗なステージで、式典に一層の華を添えていただきました。



劇作家・演出家 **角 ひろみ氏**

岡山を拠点に劇作家・演出家として活躍するとともに、「岡山劇作家会」の設立を通じて若手育成にも尽力。地域の歴史を演劇で継承するユニークな戯曲講座の講師を務めるなど、舞台芸術の発展と地域文化の継承に貢献を果たしています。



作家 **天川 栄人氏**

現代社会の問題提起と多様性への理解促進をテーマにした中高生向けYA作品は高い評価を獲得。「高校生文芸道場おかやま」の講師として創作の魅力を伝え、次世代育成にも積極的に取り組むなど文学による地域振興に重要な役割を果たしています。



特定非営利活動法人 **備前ブレイパークの会**

子どもの自由な遊び場が不足する社会課題に対し、子どもたちが自然の中で豊かに育つ環境を20年にわたり提供。子育て支援や多世代交流の促進を通じて、子育て環境の向上と地域社会の活性化に著しい成果を上げています。



大学教員（舞踊教育学）・舞踊家 **小澤 尚子氏**

卓越した指導力で環太平洋大学ダンス部を率い、岡山の歴史や文化を題材とした創作ダンスで地域文化の継承に寄与。生涯学習としてのダンス指導にも尽力して、次世代育成と地域社会の活性化に大きく貢献しています。

大学教員（舞踊教育学）・
舞踊家

小澤 尚子 氏

岡山ならではの題材を
躍動感あふれる創作ダンスに。
表現力ゆたかな若者を育む。学生や子どもたちに、踊る喜びを教える小澤尚子さん。
10年前にたった5人で始まったダンス部が、岡山ゆかりの
創作ダンスで高い評価を受けるようになるまでの道のりと、
地域への想いを伺いました。—現在の活動を始められたきっかけ
を教えてください。

幼少期から、芝居好きな母の影響で劇団に所属し、様々なダンスを学びました。ダンスが私の自己表現にぴったりはまったこと、良い指導者に恵まれたことが大きかったです。恩師たちに育ててもらったので、その循環として次の世代につないでいきたいと考えてようになりました。

地元福岡県から大学進学を機に東京へ。高校教師を経て大学院修了後、IPU・環太平洋大学の大橋博総長、そして大橋節子学長との出会いが大きな転機となりました。大学教員と兼務で体育会ダンス部の監督を立ち上げから任せていただき、自分の「やりたいこと」が実現しました。岡山に来て今年で11年目になります。

—2015年にダンス部が発足。
スタートはいかがでしたか？

1年目は1期生の5人だけ。ここからどうやって大きくしていくのか、最初の4年間は暗中模索でした。2017年に総合型地域スポーツクラブ（現在のIPUダンスアカデミー）を立

ち上げ、地域の子どもたちが毎週ダンスに通ってきってくれるようになりました。学生がアウトプットする場にもなり、部員が4学年揃った頃、ようやく活動の道筋が見えてきたように思います。

—部を大きくするために何か工夫したことはありますか？

「一緒に頑張りたいと思う高校生を探して、とにかく足を運んで挨拶に行きなさい」と大橋総長からアドバイスをいただきました。初めてのリクルートだったので、この言葉が大きかったです。



すね。ただ最初の頃はご挨拶に行きたびに「小澤先生、いつ東京に戻るの？」と言われていました。すぐに東京へ戻ると思われていたようで……。だからこそ、最低でも10年はここで踏ん張ろうと決意していました。

—ほかに、つらかったことは何かありましたか？

何と言っても、新型コロナウイルス感染症による活動停止の時期です。初めて、自分たちではどうにもできない事態に陥りました。全国大会は中止、卒業公演も無観客。観客席が空っぽの中、学生たちは大粒の涙を流しながら踊っていました。

でも、一生懸命やっていたら、いろんな人が応援してくださることも実感できました。テレビ局の方が、頑張る学生や子どもたちを集めてくださった。苦しい時でも前を向いていれば、いい方向に導かれていくものですね。

—竹久夢二や鬼ノ城など、岡山をテーマにダンスを創作されているそうですね。

岡山の方に認められ、愛され

るチームを目指したい。岡山を深く知ろうと題材を探さず中最初に出会ったのが、竹久夢二さんの素敵な美人画でした。鬼ノ城をテーマにした際は、何度も現地調査を重ねて温羅の心情や空気に迫るよう研究しました。ほかにも雪舟さんが描いた山水図をテーマに創作したり、今年は井原市出身の平櫛田中さんが制作した「鏡獅子」を題材にしたり、現在も岡山ゆかりのテーマを探し続けています。

—福武教育文化賞の受賞が決まった、
今のお気持ちを聞かせください。

岡山で10年は頑張ろうと決めてやってきて、その節目で受賞させていただくことになり、本当に光栄です。こうして応援して支えてくださる方々のおかげで、岡山が大好きになりました。これからの10年は、恩返しをしていきたい。もっと喜んでいただけるチームになって、岡山に貢献したいです。

—これから活動を始める方々に、
メッセージをお願いします。「イメージできるものは、必ず
実現できる」。私は自分がこう

小澤 尚子

おざわ・しょうこ IPU・環太平洋大学次世代教育学部教育学科講師／体育会ダンス部監督／IPUダンスアカデミー代表。日本女子体育大学大学院修士課程（スポーツ科学）修了。アメリカン・ダンスドリルチーム・インターナショナルチャンピオンシップ2005（世界大会）総合優勝、全日本高校・大学ダンスフェスティバル文部科学大臣賞受賞。2015年より現職。岡山の歴史や文化を題材にした創作ダンスを手がけ、高い評価を得る。2017年よりIPUダンスアカデミーの代表として、幼児～高校生にダンス指導を行う。



劇作家・演出家
角ひろみ氏

「常にクリエイティブでいたい」
演劇活動再出発の岡山で
創造の種をまきつづける。

劇作家・演出家として各地で活躍する角ひろみさん。地元演劇人のつながりづくりや若手の育成にも尽力しています。転機となった岡山の地で築いてきたもの、そして今後への想いを伺いました。



「岡山を代表する演劇人のお一人である角さんですが、活動を始めたきっかけを教えてください。」

私は、宝塚歌劇と吉本新喜劇の間にある尼崎市の出身で、子どもの頃からさまざまな演劇に慣れ親しんで育ちました。宝塚北高校演劇科に進み、その後関西で劇団を旗揚げして10年ほど続けましたが、結婚等を機にやめていくメンバーも出始め、劇団を解散し、私も結婚して2006年に夫の出身地である岡山で暮らすことになりました。就職も決まり、岡山には演劇をやめに来たんです、本当は。

「現在のご活躍ぶりからは想像できないです。」

私もこうなるとは思っていませんでした。転居手続きで尼崎市役所に行ったら、市が主催の近松門左衛門賞のチラシが目に残り、応募してみようかなと。最後に一本、好きなように書いてみようと思って書いた作品が、岡山へ来てから大賞を受賞しました。

それがきっかけで演劇に復帰。岡山でも戯曲やワークショップ

カオリさんという面白い方がいらつしゃって、長屋をシェアして借りていて、スミさんに加わってもらい、長屋で「ゆっくりふくらむ岡山の劇作家フェス」をやったのが2023年でした。

「そうした活動が評価されて今回の賞につながったわけですが、受賞が決まっていかがですか？」

本当にありがたいですね。これを機に、いろんな分野の方と関わっていききたい。他の受賞者のみなさんとコラボレーションするような機会もあったらいいなと思っています。クリエイターとして、この場所から創造していききたいですね。岡山から。

「これから活動を始めたいと思ってい

る方に、メッセージをお願いします。」

何でもやってみるということですね。うまくやれないからやらないというのが、いちばん寂しいと思う。演劇や創作に正解はありません。ぐちゃぐちゃでいいから、やりたいという気持ちに正直に、やってみてほしいです。

角ひろみ

すみ・ひろみ 1974年兵庫県生まれ。宝塚北高校演劇科卒業後、関西にて芝居屋坂道ストア旗揚げ。2006年より岡山在住。東京や関西、岡山など各地の団体に戯曲を書き下ろす。演出・ワークショップ講師・審査員等も多数。「螢の光」で第4回近松門左衛門賞、「狭い家の隅と蛇」で第20回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。「囃谷シルバー男声合唱団」で第59回岸田國士戯曲賞最終候補、第16回岡山芸術文化賞 幸グランプリ受賞。「劇作家フェスティバル2025 げきじゃり」では運営委員長を務めた。



などのお仕事を少しずつもらいながら、関西や東京でも演劇に携わってきて今に至ります。子どもが小さいうちは戯曲を書かせていただくことが多かったのですが、それが受賞したり、岸田國士戯曲賞の最終候補になったりして、活動の場が広がりました。

「印象に残っている出会いはありますか？」

ハレノワができたことが、私にとって大きな出来事でした。ここで高校生と戯曲をつくるワークショップや、「劇場で出会う文学」という、小川洋子さんの作品を私が演出するリーディング公演もさせていただいています。今年は「劇作家フェスティバル2025 げきじゃり」がハレノワで開催され、岡山で創造の場が広がっていることが、とてもうれしいです。



「角さんは、活動の中でどんなことを大切にしていますか？」

常にクリエイティブでありたい。生活者であって創作者であることを意識しています。日々の暮らしが、創造があつて楽しいものでありたいですし、何か寂しさや不安を抱えるお客さんに、力になれるといいなと思っています。

「岡山劇作家会とは、どんな活動をされているのでしょうか？」

口腔癌研究者であり劇作家である河合穂高さんと立ち上げたのが、この会です。河合さんと、コロナで街がロックダウンしてディストピアのようになった夜に、「話そうよ」と言っただけなんです。この先どうなるかわからないけれど、何か拠り所になるようなものがあるといいなと思ひ、とりあえず名前だけでも付けよう。大風呂敷というか、広がりが生まれる名前がいいなと思っただけですが、狙い通り、よく「岡山劇作家会って？」と聞いてもらえるんですよ。それが「小さい劇作家フェス」につながっていききました。スミ

作家

天川 栄人氏

「多様性を取りこぼさない」
開かれた態度で
10代の読者と向き合う。

10代の読者に向けた YA (ヤングアダルト) 小説や児童書分野で知られる岡山出身の小説家・天川栄人さん。昨年、出産を機に岡山へUターンされ、地元での創作や若者の育成にも取り組む天川さんに原点や小説家としての想いを伺いました。

「現代社会の複雑な問題を描きながら、子どもたちが自分と向き合う姿を表現する小説家の天川栄人さん。高校生文芸道場おかやまでは講師も務め、若者の育成にも尽力されています。まずは天川さんが執筆活動を始めたきっかけを教えてください。」

高校の文芸部が創作の原点です。当時は小説だけでなく、短歌や俳句、詩も書いて、大会にも出場していました。あとは、リレー小説を書いたり、テーマを決めて共作したり。一人で黙々と取り組むのではなく、毎日部室に顔を出してみんなで作品を作るのを楽しんでいました。でも、なかには幽霊部員もいて、彼らはたまに現れては大会に出て、さらっと賞をとっていくんです。「私はこんなに頑張っているのに！」と悔しさもありましたが、むしろ小説や詩を書くことは特別な才能ではなく、誰でもできることなんだと思いました。

「大学4年生でライトノベル作家としてデビューされ、その後は児童書、YAへと転向。YAの一作目が岡山を舞台にした『おにのまつり』ですね。どのように制作されたのでしょうか。」

う受け取るかはその子次第。「あそこで終わると思わなかった」と言われることもありましたが、そのモヤモヤを大切にしておしと思っています。

「今回の受賞を機に挑戦したいことはありますか？」

私はやっぱりみんなまで書くのが好きだから、ワークショップを開きたいです。それも1回きりではないものを。私自身、高校生のときに参加した文芸道場おかやまで、「絶対に書きっぱなしにしないで」と言われたことがあって、今でも修正している時間の方が圧倒的に長い。何度も書き直すことで、物語は磨かれていきます。だから、1回でおいまいではなく、みんなで読み合っ、ブラッシュアップするような講座にしたいですね。

「対象は若者ですか？」

そうですね。若い世代に書いてほしいという想いがあります。とくに私は中高生の文章が大好きなんです。半径2メートル以内で拾ってきた言葉だけで綴られた文章は、大人になると

「10代に向けて物語を書くときに意識していることは？」

多様性を取りこぼさないことは特に大切にしています。以前、LGBTQの当事者に取材をしたときに「子どものとき本が嫌いだっ。だって、私たちのようなキャラクターは本のなかに出てこないから」と言われて、すごくショックを受けたんです。子ども向けの本を書いている以上、子どもを本嫌いにさせてはいけないし、マイノリティーから読書体験を奪ってはいけません。ひとりひとりバラバラの性を生きていて、多様な子がいます。もちろんすべての人を克明に描くことはできませんが、マジリティーの設定に偏ることなく、多様性を取りこぼさないことは最低限必要な姿勢だと思っています。

それから読者を正解に導くのではなく、選択肢をたくさん用意して、「私はこう思うけれど、あなたはどう思う？」と開かれた態度で書くことも意識しています。だから、あえて登場人物の問題は解決しないまま終わります。読者ひとりひとり、ど

ライトノベルではファンタジーを書いていましたが、YAではリアリズムに挑戦しました。自分が10代を過ごした土地・岡山をテーマにしたいと思っていたので、うらじゃを題材に。温羅伝説の取材で吉備津神社や鬼ノ城にも訪れ、うらじゃの実行委員会にもご協力いただきました。この作品では、集団からはみ出ってしまった子どもの話を書こうと思っていたので、中央集権から排斥された移民の話である温羅伝説(諸説あり)にオーバラップさせています。

絶対に書けません。今のあなたにしか生み出せない言葉がある。作品として残しておくことで、将来の財産にしてほしいと思っています。

天川 栄人

てんかわ・えいと 1991年、岡山県生まれ。「ノベルダムと本の虫」で小説家デビュー。うらじゃをテーマにした『おにのまつり』で第9回児童文学賞 少年小説賞受賞、他受賞歴多数。「わたしは食べるのが下手」は第71回青少年読書感想文全国コンクール課題図書に選出された。新刊『私たちの卒業写真』発売中。高校生文芸道場おかやまでは講師を務める。





子どもが自然のなかでのびのび遊び、育つ場へ。
想いを貫いた20年間。



特定非営利活動法人
備前プレーパークの会 代表理事
北口 ひろみ 氏

20年間、さまざまな壁にぶつかりながらも、地域の方と助け合いながら「備前プレーパーク」を続けてきた北口ひろみさん。これまでの軌跡と、変わらない想いとは。

ようとしたんですが、地主のおじさんが声をかけてくれて、山をお借りできることに。ここではプレーパークだけでなく、備前市地域子育て支援拠点としての運営もスタート。「森のようちえん」も開いて、約10年間お世話になった頃、西日本豪雨やコロナ禍を経て、今度は「命を守る場所」が必要になってきました。そこには園舎がなく、土砂崩れの危険もあったのです。そこで、少し下った場所にある耕作放棄地を整備して、現在の場所に拡張。当時、備前市が待機児童で困っていたので、新しく園舎を作り、小規模保育園「どんぐりえん」の運営も始めました。

―遊び場をつくることから、地域の子育て拠点へと変化した20年間。壁にぶつかりながらも続けられたのはなぜでしょうか？

困ったときに悩みを打ち明けると、必要な方が手を差し伸べてくださって。本当にたくさんの周りの方々に助けられてここまでできました。それに、子どもたちののびのび遊び、つながりあって、みんなで子育てする場

に、という原点にある想いはずっと変わっていません。

―今回の受賞を機に、挑戦したいことはありますか？

共働きが当たり前になり、プレーパークに來たいけど、来るのができない子どもが増えてきました。そこで、車に遊び道具を積んで、放課後児童クラブや学校、園、ひろばなどを訪れるプレーカーという事業を進めています。ただ単に遊び道具を持っていくのではなく、これまで培ってきた想いも届けられるような態勢を整えていきたいです。それから、プレーカーを導入しているほかの市町村とのつながりもできたらいいですね。情報交換をして、外遊びのたまきをしていきたいです。

あとはこれまで特に未就学児までの「遊育」に力を入れてきましたが、学童期に入るとプツツと切れるのがもったいないと思っています。遊びは学びであり、遊びから探求の世界へとつながります。ぜひ教育関係の先生方にも「遊育」をご理解いただけたら嬉しいですね。そのため

―子どもが自然のなかで自由に遊べる「プレーパーク」をオープンして20年。北口さんが活動を始めたきっかけを教えてください。

30年前、地元の岡山を離れ、孤立した子育てで悩んでいたとき、テレビでプレーパークの存在を知り、こういう場所でも子育てができれば……とずっと思っていました。夫の地元である備前市に戻ってからは、日本で初めて「プレーリーダー」の職に就いた天野秀昭さんの講演会や勉強会にも足を運んで、いつしか「自分でプレーパークをつくりたい」という気持ちに。教えて育てる「教育」だけでなく、自ら遊んで育つ子ども主体の「遊育」の時間が必要だと強く思ったんです。

最初の遊び場は自宅の庭に。穴掘りしたり、基地づくりをしたりしてわが子と近所の子がのびのび遊んでいました。でも、だんだんとこの時間を過ごせるのがわが子たちだけでいいのかな？と思うようになって。たくさんの子が友達と育ち、親御さんとも繋がりがから子育てができたらどんなに幸せだろうと。



北口 ひろみ

きたぐち・ひろみ 特定非営利活動法人備前プレーパークの会 代表理事。2009年に地域の協力者から借り受けた私有地を整備し、自然の中で自由に遊べる「森の冒険みつ基地」をオープン。近年は年間9000人以上が訪れる拠点となっている。2017年には利用者支援事業を開始し、同年、認可外保育施設「森っこえん」、2022年には小規模保育園を開園。

には、待っているだけでなく、まちへ地域へでていく機会を増やして、伝えていく、届けていくことにも力を入れていきたい。そして、共感いただくことで、私たちがサービスを提供する側になるのではなく、子どもをまんなか地域や保護者、教育機関、子育て支援関係者、団体、企業、大学、行政など幅広い分野の方々と手をつなぎあい、心豊かな育ちあいの場を「ともに創る」こと。それを大切にしたいと思っています。

そんな想いを周りに伝えていくうちに仲間ができて、備前プレーパークの会を立ち上げることになりました。

―2005年には備前市の公民館で初めてプレーパークを開催されていますね。

当時はお金もないのでドラム缶や竹、木材などを持ち寄った手作りのプレーパーク。涙が出るほど嬉しかったのを覚えています。そこから3年間は公民館や公園を転々としてきました。しかし、いろんな壁にぶつかって、2008年には存続の危機に陥ってしまつて……。もう諦め



多彩な活動と成果を紹介するオンライン成果報告会

2024年度に助成を受けた団体・個人による成果報告

2025年度 教育文化活動助成 成果報告会

気づきや学びのパワーアップ・デイズ

24団体がオンラインで活動報告
延べ160名が参加

9月5日、7日、8日の3日間開催したオンライン成果報告会は、延べ160名が参加。発表は、「文化・芸術」から「地域社会の課題解決（防災・福祉・環境）」、「次世代育成のための教育・居場所づくり」まで、人々の生活と密接に関わる非常に幅広い分野の報告でした。発表者は、経験のない団体・個人を最優先に依頼し、発表経験になることも考慮しています。

3日間の発表内容は、財団公式YouTubeチャンネルでご覧いただけます。

これらの動画は、活動で得られた発見や知恵が詰まった宝物です。これから何かを始めたい方のヒントになったり、地域の課題解決の助けになったり、そして何より岡山の教育文化の発展に貢献しています。

なお、これまでに開催されたオンライン成果報告会の発表動画も財団公式YouTubeチャンネルでいつでもご覧いただけます。現在、143本もの動画をアーカイブしており、皆さまの活動の成果を社会に共有しています。



審査委員

公益財団法人
みんなでつくる財団おかも理事
石田篤史さん



ご報告いただいた活動は、どれも大変素晴らしいものでした。共通項として見られるのは、文化をつなげる視点と、元々あるものをより生かしていくという姿勢です。

活動を継続していく上で、助成金をはじめとする様々な資金の活用は不可欠であり、その名の通り成長を助けるものとして重要です。財団からお話が合った「自走」とは、何かを自分たちだけで完結させることではなく、頼り、関係を構築していくことも含みます。福武教育文化振興財団は、こうした関係構築に力を入れており、本日の報告会もその一環です。

活動に熱中していると、時に周囲が見えなくなりますが、あえて周りを見渡し、外部とつながることで、活動がより円滑になり、新たな可能性が開けたりすることが多々あります。

財団には、助成金の提供に加え、これらの素晴らしい活動を広く知ってもらうための支援も期待します。

参加者アンケート結果

普段知ることのない活動について知る機会となった

自分たちの活動と親和性のある団体の存在を知れて、繋がりを感しました

コンパクトな時間にそれぞれの実践が凝縮されていて非常に聞きやすかった

活動の目的と達成方法が明確で大いに参考になった

私たちの活動の形態と違う団体ばかりで別の視点を勉強できた

県北のためオンラインは参加しやすいし、遠方の方と交流できる機会

皆、子どもたちに受け継いでいきたいという思いが根底にあると思った

助成活動によって地域に新たな活気が生まれてきていることを知ることができた

邑久高等学校
セトリ運営指導委員会
瀬戸内市と連携して
地域のリーダーを育成する探究活動

おかもSDGsアワード2024
「時に優良な組織」受賞

頭島あかりまつり実行委員会
頭島あかりまつりを多世代
参加可能にするためのプロジェクト

9月7日頭島あかりまつり開催。

一般社団法人 勸進プロジェクト
【講演会】「文化財の活用と維持」
～遺していくための伝統技術～

一般社団法人
勸進プロジェクト
成果報告書 98ページ

「たけべよいとこ」盆踊り保存会
建部町活性化のための
「たけべよいとこ」盆踊りの再生と継承

子どもたちへの指導

清心・自然体験教室
自然との共存を目指して、
フィールド系女子を育成する

岡山多胎サークルおてて
多胎の広場

活動の様子

岡山県演奏家協会
「Homage愛をこめて〜敬愛〜」
コンサート

子どもの未来を応援する会
子どもの成長を支援する
公園をみんなで作る

3. 活動内容

糸あやつり人形劇団「つきみ草」
「泣いた赤鬼」の新たな制作から上演を
通じて糸あやつり人形劇の普及

一般社団法人
たわわの里プロジェクト
学校よりも起業を選んだ小学生と
その母親を囲むゴミ拾いイベント

イベント内容と経過

「ひと・もの・こと」とつながる
佐伯小夢プロジェクト
児童と地域を結ぶ
新しいカタチの体験活動

「ひと・もの・こと」とつながる
佐伯小夢プロジェクト
成果報告書 91ページ

特定非営利活動法人
ぶどうの家わたぼうし
逃げ遅れゼロのまちを目指した
「演劇」ワークショップ

ワークショップの様子

岡山県現代舞踊連盟
Dance Performance2024
浦人ーうらびと

特定非営利活動法人 こうのさと
ASO-VIVAプロジェクト、スコレーパーク
森の舞台建設と完成披露会

劇団夢幻月
ファミリー劇場
「チャップとふしぎな森」

「月の輪の心を語り継ぐ会」
月の輪の心を語り継ぎ、
次世代に継承し地域振興に資する活動

今後の目標

一般社団法人
シネマフィルム
シネマフェスティバル2024

岡山大学
「子どもと音楽」研究チーム
地域とグローバルをつなぐ
おかも国際和楽器学生フェスティバル

清水 ゆき
ミュージカルチャリティー公演

弓削フリースペース
中高生の居場所づくり

②中高生の「やってみよう」への伴走支援

Palette Scene
アート・文化を身近に
感じてもらう取り組み

2024年度成果報告

ノートルダム清心女子大学
ソーシャルデザイン研究会
大学生と留学生の異文化チームによる
犬島の社会問題解決と活性化

Social Design

ユナイテッド・ミュージカル・カンパニー
プロと有志合唱による
「グレイテストミュージカルコンサート」

グレイテストミュージカルコンサート2024

GifTree
サイエンス&テクノロジー ×
多文化交流 × クッキング

2024年度成果報告

トークフォークダンス

参加者は1分間という限られた時間を使って、自己紹介と活動紹介を行いました。フォークダンスのように次々と相手を変えながら紹介し合うことによって、参加者同士の距離が大きく縮まり、関係性を築き始める第一歩となりました。



軽食とドリンクで語り合う懇親の場

参加者全員による交流会

参加団体・個人の皆さんが一堂に会する交流会が開催されました。美味しい軽食を囲み、情報交換や意見交換を立食形式でざっくばらんに、新しいつながりを広げました。



審査委員 公益社団法人 岡山県文化連盟 事務総括 高田佳奈さん

今年の対面での成果報告会の参加団体数は78団体。これだけの規模の成果報告会は、日本国内でも稀有な取り組みです。私も審査委員として、毎年参加を楽しみにしています。

ご発表いただいた4団体の皆様は、発表資料や原稿の作成など大変だったと思いますが、あんなに多くの人が自ら耳を傾けて話を聞いてくれる機会というのはそうそうあるわけではありませんので、活動を知らしめるには最高の舞台と言えます。まだ経験していない団体の皆さんも、是非積極的に登壇されることをお勧めします。

言わずがな、対面の良さは直接顔を突き合わせて話ができることです。グループ交流会やトークフォークダンス、交流会などのチャンスを生かして気になることをその場ですぐに質問したり、声掛けしてみたい人と思いついて名刺交換したり。一期一会の出会いがあるかもしれません。私自身、会場が旧友と約20年ぶりに邂逅しました！



4団体がステージで発表 約170名が参加

9月27日開催した対面形式による成果報告会には約170人もの方にご参加いただきました。報告会は、単に成果を伝えるだけでなく、参加団体の皆様同士が深く交流し、新たなつながりを生む場として企画しました。さらに、他の団体にも生かせるような有効性の高い活動内容や成功事例を共有することにも重点を置きました。

当日は、まず4団体によるステージ発表で、具体的な活動内容を紹介いただきました。その後、グループ交流では発表者を囲んで、質疑応答を通して理解を深めました。続いて、新しい試みである「トークフォークダンス」は、普段接点のない方とも交流をしていただくことを目的に企画。1分間で自分たちの活動を伝える練習の場にもなりました。最後は、参加者全員での交流会です。会場のあちこちで話が弾み、皆さんがリラックスして楽しんでくださっている様子が印象的でした。

内容盛りだくさんの一日となりました。参加された皆様の活動がさらに発展し、課題解決のヒントとなり、次のステップへの一助となれば幸いです。

代表して4団体が具体的な活動内容を報告しました。

成果報告会



一般社団法人
犬島ととと倶楽部

犬島の関係人口を創る
『くらしを楽しむワークショップ』



ひとづくり・まちづくり
フォーラム実行委員会

旅するひとづくり・
まちづくりフォーラム2024



一般社団法人
コノヒトカン

音声配信でコノヒトカン1000部
プロジェクトの活動を発信!



The World Kitchen
実行委員会

The World Kitchen
～多様性の輪を岡山に～

参加者を囲んで質疑応答

グループ交流

発表を聞いて関心を持った団体や、さらに詳しく話を聞きたい発表者のもとへ、参加者は自由に移動しました。参加者は発表者を囲み、自由に質問したり、感想を伝えたりして交流を深めました。



僕が、活動をはじめた理由

生まれも育ちも（ほぼ）葛飾柴又。寅さんのごとくふらりと和気町に来てから、もうすぐ十年が経ちます。お気に入りの場所は、行きつけの床屋さん。「すぐその十字路の角に昔あったパン屋さんのホットドッグが人気だった」とか「和気町には約八千万年前に火山があり、その火口の上で今暮らしている」など、髪を切るわけでもなく立ち寄っては、珈琲を片手に、店主やときにはお客さんとまちのことに話すが、暮らしの楽しみで。

少し好奇心を働かせてみると、地域は面白いモノ・コトで溢れている。それを追いかけているうちに、人と出会い、地域とつながっていく。その積み重ねのなかで、自分の中の「ふるさと」がじわじわと育っていく感覚を持つようになりました。

一方で、便利で情報にあふれた現代では、好奇心を持つ余白が失われがちです。和気町では地域おこし協力隊として、小・中学生の放課後の学び場を運営してきました。子どもたちの興味は画面の中に向かいがちで、大人もまた、忙しさの中で足元の世界を味わう時間を持ちにくくなっていると感じていました。

もつとこの地域を、この世界を、一緒に面白がれないだろうか。そんな思いから活動を始めました。古墳を探検したり、やきもの窯をつくったり、「木を切ってみよう」という声から林業体験を開いたり。それぞれの好奇心を出発点に、活動を紡いでいます。足元から世界を面白がり、多様な他者とともに何かをつくり出す——そんな創造の積み重ねを、地域や学校、子どもから大人にまで広げ、それぞれの「ふるさと」を發酵させていきたいです。

「足元の世界をもっと面白く」

文・中村和馬 タマリ

タマリ

和気町を中心に、子どもから大人、そして学校の先生までが「好奇心」を出発点に探究する場づくりを行う。さまざまな体験活動や対話を通して、足元の世界を面白がりながら多様な他者と関わる。そんな営みを重ねることで、地域の中で好奇心が循環する生態系を育んでいきたい。



西栗倉での林業体験の様子



子どもたちと一緒にやきもの窯を作る様子

我が家は上に二人兄がいて末っ子がふたごでした。かわいいなと憧れていたふたごがまさか我が家に！と驚きと嬉しさと不安とが入り混じった中で妊娠生活がはじまりました。ふたご育児と検索するとインターネットやSNSではたくさんの情報にあふれていて取捨選択に迷い、不安な気持ちになりました。生まれてからは日々の生活に必死で情報を探す時間もなく、外出も難しく、やっとの思いで子育て広場に行っても、同じようにふたごを子育てしている人にはなかなか出会えませんでした。

ふたごはかわいくて、でもやはり何事も2人分なのでもちろん大変、そんな喜びや悩みを同じように多胎を育てている人たちと共有したい、もつと妊娠期から知っておきたかったことなどを先輩ママから教えてほしいか、と思ったのがきっかけでした。

NPO法人まんなかさんが運営している広場をお借りしてふたごが8カ月のときにふたごの交流会を初開催し、不定期で行っていました。多胎家庭の居場所として需要があることを実感したのでサークルを立ち上げて現在にいたります。岡山市と倉敷市児島で主に開催していますが、少しずつ周知されて、それ以外の遠方の地域からの参加や、妊婦さんも参加してくれるようになりました。

妊娠期から来てくださる方も少しずつ増え、育休から仕事復帰されても遊びにきてくださるので成長と一緒に感じることもできるのとても嬉しいです。これからももっとたくさんの多胎児、多胎育児中のご家族とつながりたいと思っています。

「多胎家庭のつながり求めて」

文・里見沙恵美 岡山多胎サークルおてて

岡山多胎サークルおてて

多胎児特有の悩みや困難を共有し育児不安を軽減し育児仲間を増やすことが目的。広域に情報を発信し妊娠期からつながりを継続するために活動を行う。月1回程度の交流会や季節のイベントを開催し情報共有や悩み相談ができる場所を設けている。



交流会で記念撮影



夏まつりの様子

私が、活動をはじめた理由



合同会社モッコ代表社員

齊藤 智美

Saito Satomi

名古屋出身。ビル管理やイベントホール運営といった仕事の傍らで、2008年より名古屋市美術館のガイドボランティアの活動を始める。2010年のあいちトリエンナーレを機にアーティスト・イン・レジデンスに興味を持つ。2014年よりギャラリーサイトウファインアーツ(横浜市中区)のマネージャーとして、倉敷と横浜をつなぐアーティスト交換プログラムに携わる。2015年合同会社モッコ設立。現在は、ギャラリー機能を玉島に移し、アーティスト・イン・レジデンスを軸としたアートセンターを運営している。

倉敷市玉島・清心町商店街の一角に、齊藤智美さんが運営するアートセンター「TAMAYA TAMASHIMA」があります。アーティスト・イン・レジデンスを中心とした複数の空間で、レジデンスの隣にはレンタルキッチン、さらに隣にはホワイトキューブがあり、その斜向かいにも新しく物件を購入したそう。齊藤さんはなぜこんなことを始めたのか、お話を伺いました。

「場」を貸す仕事が、面白い。

2013年のあいちトリエンナーレをきっかけに、兵庫や尾道など各地のアーティスト・イン・レジデンス取材します。尾道に滞在していたある日、「今日は面白い人が来るよ」と誘われた集まりで、現在の旦那さんと出会いました。翌年には、彼が運営する横浜のギャラリーでマネージャーを務めることになりました。

「場」を貸す仕事は、元々は洋品店だった建物を改修して生まれたアーティスト・イン・レジデンスがあります。瀬戸内国際芸術祭の開催年にアーティストが滞在するほか、東京藝術大学の学生が短期で利用することもあります。けれどこの場所は、芸術家だけの拠点ではありません。高齢者サロンや介護士や医療従事者の合宿型研修にも活用されています。わざわざ職場から3駅も離れたこの商店街を選び、食事や宿泊を共にし、翌朝そのまま現場へ出勤していく介護士さんたちもいるそうです。

名古屋出身の齊藤さん。高校卒業後、ビル管理やイベントホールを運営する会社に就職しました。仕事の傍ら美術館のボランティアをしていたとき、作品の解釈をめぐって先輩ボランティアと意見が食い違うことがありました。亡くなった作家には確かめることができないけれど、現代アートなら作家本人と話ができる——。その気づきがきっかけで現代アートに惹かれ、当時は後先を考えなかった」と退社を決意します。勢いで辞めたものの、どうしたらよいか。「アートをつくれるわけでも、専門的な勉強をしたわけでもない」と負い目を感じているのは裏腹に、人との出会いは齊藤さんをアートの道へと誘います。2013年のあいちトリエンナーレをきっかけに、兵庫や尾道など各地のアーティスト・イン・レジデンス取材します。尾道に滞在していたある日、「今日は面白い人が来るよ」と誘われた集まりで、現在の旦那さんと出会いました。翌年には、彼が運営する横浜のギャラリーでマネージャーを務めることになりました。



取材・文 森分 志学

一体場とはなんだろうか。



齊藤 智美 さん

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学 Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内20市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

夫妻が玉島に拠点を移したのは2014年頃です。商店街には門扉や欄がなく、内と外の境界が曖昧で、屋根に守られた通路はまるで店舗の縁側のように語る齊藤さん。店舗の前でもパフォーマンズができる商店街の「場」の力に魅力を感じていました。ある日、玉島クリエイティブリユースの拠点IDEALABを主宰している大月ヒロ子さんと空き店舗を見に行き、のちに拠点となる洋品店に出会います。店主から「商売目的には向かない立地だから、これまで断ってきた。ここで何がしたいの?」と聞かれて、齊藤さんは開口一番、「まずはシャッターを開けて、店舗の光を外に出します」と答えました。その言葉に店主が共感し、譲渡が決まりました。

作家の制作風景をそばで見ているだけという齊藤さんの願いと、駆け出しの作家を支えたいという旦那さんの思いから、アーティスト・イン・レジデンスは始まりました。ネットでの募集は行わず、紹介によって利用者が訪れます。滞在した人が次の利用者を連れてくる、そんなゆるやかなつながりが生まれています。高校生のダンスパフォーマンスが行われたり、レンタルキッチンで手話カフェが開かれたり、齊藤さんの「場」によって輪が少しずつ広がっています。



デイスコンのこと

文 齊藤 牧枝

岡山スケッチ

vol.6

8月のある日、瀬戸内国際芸術祭夏会期の宇野港会場で毎日のように顔を合わせる80代のお母さんからお誘いがありました。

「芸術祭終わったら、デイスコンにおいで。」

「デイスコン? 何ですかそれ?」

聞けばそれは、老人会のみなさんが毎週土曜日に楽しむ屋内スポーツとのこと。詳しく尋ねてみると、「やってみれば、すぐわかるわ! いいから、おいでよ!」

どうやらデイスコンはデイスとコントローलを合わせた造語。円盤状のプレートを投げて得点を競う競技で、岡山で生まれたようです。調べて文字を追うだけでは要領を得ず……とりあえず行ってみることに。

夏会期閉幕後の9月、会場にはすでにコートラインが引かれ、両脇に5脚ずつ椅子が並んでいました。老人会メンバーが、赤と青の二組に分かれ、着席すると準備完了。15分のタイムアップが動き出し、ゲーム開始。まずは、コート内に「ポイント」と呼ばれる黄色いコマが投げられます。このポイントめがけて、各チーム6枚ずつデイスコンを投げるのです。全部投げたら1ゲーム終了。ポイントにどちらがどれだけ接近しているかで得点が決まります。これを15分間繰り返して、勝負をつけます。

投げるフォームは輪投げのようです。ポイントに近づけるだけでなく、敵のデイスコンやポイント自体を弾き飛ばして、形勢を一変させるという大技も繰り出されます。しかしこの競技、デイスコンを投げる際のコントロールが何より難しいのです。デイスコンは片面が青、もう片面が赤となっていて、下手をすると簡単に敵の色に反転します。敵のデイスコンを弾くつもりがポイントに寄せてしまったり、味方のデイスコンを遠くに飛ばしてしまったり。私のデイスコンは明後日の方向にばかり飛んでいき……最後まで大逆転の可能性があり、そこが面白いところなのですが……どうでしょう? 伝わっているでしょうか?

結果、この場でデイスコンについてお伝えしたのはこれだけ。「やってみたらすぐわかる、楽しい競技です。」11月には、老人会と子ども楽級の交流試合があります。気づけば私も老人会最年少メンバーとして出場が決まっていました。10月は全く練習に行けていませんが、絶対に得点につながる投盤をしてみせる! 闘志だけは一人前です。

齊藤牧枝(さいとう まきえ)
横浜出身。2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭のボランティアサポーターこえび隊として、芸術祭にかかわったことがきっかけで、2012年に本格的に玉野生活をスタート。NPO法人瀬戸内こえびネットワーク(こえび隊事務局)職員として日々活動中。

マリンバと私をつなぐバディ

「マレット」



2025年9月、私はJunko Fukutake Hallで開催された、内山詠美子さん出演のコンサートに足を運びました。そこで奏でられていたマリンバの音色は、優しくてやわらかく、身体全体が包み込まれるようなあたたかさがありました。

演奏中に内山さんが持っていたのは、^{どう}藤でできた細長い持ち手の先に、白い毛糸で丸い形に巻かれているマレットです。舞台上には、長さや丸の大きさが違う十数本のマレットが用意されています。左右の手で2〜3本ずつ持ち、1曲が終わるごとに持ち替えながら演奏していました。

後日、拠点であるオーストリアに戻った内山さんに話を伺うことができました。当日使っていたものだけでなく、所持している約50本のほとんどが、恩師である安部圭子さんモデルのマレットだといえます。マリンバ奏者は色々なメーカーやモデルを何百本と持ち、演奏する曲によって使い分けしている人が多いなか、内山さんは大学生時代から同じモデルを使い続けてきました。

「曲調によって、マレットを使い分ける演奏者が多いですが、私はどんな曲でも安部先生モデルのマレットを使っています。マリンバの音色を変えるのは、マレットではなく演奏者の腕だと、安部先生の姿を見て学びました。何より、これ以上ないくらいマレットの音色が素晴らしいんです。何度も修理に出したり買い替えたりしながら大切に使い続けています」

マリンバ奏者として腕を磨いてきた一方で、ここ数年は「マリンバが鳴りたいように鳴らせてあげることも必要」と考えるようになりました。マリンバの声を聴いていると、時折マリンバが勝手に歌っているかのように、気持ちよく演奏できることがあるといいます。

今やマレットは、内山さんとマリンバとの会話をつないでくれる存在。「内山さんにとってマレットとは？」と聞くと、少し考えた末に「バディ!」との回答が。マレットの特性に頼りすぎず、自身の演奏技術を磨いてきた内山さんだからこそ、演奏するための道具を超えた、マレットとの信頼関係を感じました。

(絵 タケシマレイコ/取材・文 小溝 朱里)

編集後記

◆鏡開きも終わり、賑やかだった新春のムードは落ち着き、街は平穏な日常の風景を取り戻しています。財団事務所は、昨年12月にベネッセコーポレーション広瀬町社屋から高柳オフィスへ移転し、新しい環境のもとで業務に取り組んでいます。◆高柳オフィスは、ベネッセコーポレーションの前身である福武書店時代に成長発展の証しとして誕生した歴史を持っています。◆福武書店の創業者 福武哲彦は、生徒手帳の開発からスタート。その後、「進研ゼミ」などの通信教育事業を拡大し、1995年には社名が「ベネッセコーポレーション」に変わりました。◆1986年に福武哲彦が亡くなり、岡山県の教育文化の発展を願う遺志を継承するため、福武総一郎が地域に根差した福武教育文化振興財団を設立。2026年の今年8月には40周年を迎えます。◆その歴史ある地で、私たちが気持ちを新たに、より一層財団の活動に精進してまいります。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。◆さて、「ふえき」での主役は助成先や受賞者のみなさまで。みなさまの活動がより広く知られ、多くの方に共感していただけるよう、その思いやストーリーを丁寧に紡ぎ、発信してまいります。◆そのために、私たちはこれからも、その活動に寄り添い、「ふえき」の名の通り、変わらぬ姿勢で応援を続けてまいります。(W)

機関誌「ふえき」
読者アンケート
ご協力ください。

▼アクセスは
こちらから



公益
財団法人

人づくり、地域づくりを応援します

福武教育文化振興財団

〒700-0034 岡山県岡山市北区高柳町東9-1 株式会社ベネッセコーポレーション高柳別館1階
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190 URL <https://www.fukutake.or.jp/>
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp



福武教育文化振興財団
ウェブサイト



コミュニケーション・マガジン
and F | アンドエフ



教育文化活動助成
成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易

vol.89 2026.1.25

編集・発行 公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作 株式会社吉備人
デザイン 久延 フミカ (ヒラガナ企画合同会社)
表紙画 タケシマ レイコ
印刷 研精堂印刷株式会社